講演

稲作漁撈文明が地球と人類を救う

安田　喜憲

一、稲作の起源

私は、若い頃、ヨーロッパ文明に憧れて、ギリシアやローマ文明の研究をしておりました。広島大学のあと、今、ここにいらっしゃいます伊東俊太郎先生が、国際日本文化研究センターにいらっしゃって、一緒に仕事をさせていただきました。広島大学から京都の国際日本文化研究センターに移りましても、最初はやはりギリシア・ローマのことを研究しておりました。一九九一年から九四年の間、伊東先生と一緒に「文明と環境」という大きなプロジェクトをやらせていただきましたが、その時はまだ実は関心がギリシア・ローマに向いていまして地中海文明の興亡に興味がありました。

一九九一年、ちょうど「文明と環境」が始まった時に、梅原猛先生と中国の長江に行きました。私は長江、中国というのはあまり好きではありませんで、行きたくないなと思いましたが、梅原先生が、「行こう行こう」とおっしゃって、それで浙江省の南の方にある河姆渡という遺跡をご案内しま

した。先生は七〇〇〇年前の籾殻を見られて、たいへん感動されました。今まで稲作の起源は、雲南省で五〇〇〇年ぐらい前に誕生した、と言われていたわけです。ところが七〇〇〇年前の籾の束が出てきた。それで先生が感動して、これはひょっとすると人類史を書き換える発見かも知れない、お前はその稲作漁撈の研究をしろと、こうおっしゃったわけです。でも私はそれまでギリシア・ローマを研究していました。稲作文明というのは我々が慣れ親しんだもので、わざわざ研究しなくてもわかるし、せいぜい五〇〇〇年ぐらい前でたいした事はないだろうと思っていました。

その後、浙江省の良渚に行きました。そこで出土した五〇〇〇年前のすごい宝物を、館員が大事そうに持ってきました。中を開けましたら石なんです。私はギリシア・ローマの研究をやっていましたから、ミケーネ文明の黄金のマスクが宝物だと思っていました。ところが金銀財宝が出てくるかと思ったら、「石ころが宝物だ」と、こう言う。「たいしたものではない」と思って、私はあまり興味がなかった。ところが梅原先生は、玉を取り出して、見られた瞬間に手が震えているわけです。当時一九九〇年代初めは、中国はまだ発展してなくて、トイレが臭いんです。「早く帰りたいな、こんな所と付き合っていたらかなわんなあ」と思って立っていたところ、梅原先生が、私に向かって、「お前この良さがわからんのか」と言って、えらい怒られるんです。何でそんな石ころを見て興奮しなければいけないのかと思って、「そうですか」と言って、見たような振りをして、その時はそれで終わりました。ところがその梅原先生は、石、玉ですね、玉を見られた瞬間に、ここに巨大な稲作漁撈文明を背景とした文明が存在することを直感されたのです。この文明は後で「長江文明」と我々は名づけたんですけれども、長江文明があるということを直感されたわけです。

二、長江文明の発見

その年の、関西の番組で宵越しトークという正月の番組がありまして、当時、京セラの会長をなさっておられた稲盛和夫さんと梅原先生が討論されたんです。その時、梅原先生が、「中国の稲作の起源は古くて、それに立脚した古代文明を私は発見しました。調査費の援助をお願いします」と、稲盛さんに言われたんです。稲盛さんは三分考えておられて、「わかりました。今日の食事は高いものになりましたね」と。調査費をボーンとくれはったんです。お金をもらったからもう、否応なしです。私はまだギリシア・ローマの研究が完全に終わっていませんで、もっとやりたかったんです。ところが「明日から中国へ行って来い」と言われまして、どちらかと言うと無理やり拉致されて、中国の調査に行きました。稲盛先生もお連れしました。玉のある部屋にお連れして、「三〇分ぐらいで出て来られますか」と言ったら、「ああ」と言われて入られたんです。ところが一時間たっても出て来られないんです。稲盛先生もその玉を見られた瞬間に、すごい技術であるということを直感されたんですね。

お二人の援助を得て、長江文明の研究が本格的に始まったのが一九九七年です。大体一〇年近くやりました。最初は、はっきり言って私は稲作漁撈文明を馬鹿にしていました。長いこと稲作漁撈のハニ族の研究をされている欠端先生から『聖樹と稲魂』というご本を一九九六年にいただきましたが、長いこと拝読していなかった。それぐらいに私は西洋の文明、つまりパンを食べて肉を食べてミルクを飲む、そういう文明に憧れていましたから、米を食べて魚を食べる人間が、文明を持っているとは思いませんでした。ところが研究を始めてみると、畑作牧畜文明、パンを食べてミルクを飲んで肉を食べる、現代の西洋文明の源流になった文明とは全く違う文明が存在する可能性が見えてきた。しか

も非常にその文明は奥が深いんです。米を作り、魚を食べる文明というのは奥が深い。やってみて初めてその奥深さというのがわかりました。

まず一つ、稲作の起源は、今まで五〇〇〇年前だと思われていた。ところが稲作の起源は一万四〇〇〇年前まで遡るということがわかってきた。図1は一万五〇〇〇年ぐらい前の東アジアの古地理図ですが、日本列島の周囲は、朝鮮海峡が非常に狭く川のようになっています。台湾は中国と陸続きになっている。森の分布は、ピンク色のところ、ここは森があるわけです。この森は落葉の広葉樹と針葉樹が混生した森です。さらに南は樫や椎の森がある所です。ところが中国の北のほうは森が全くありません。

稲作がどこで始まったかというと、湖南省の玉蟾岩遺跡という所で、今から一万四〇〇〇年ぐらい前に始まっているということがわかってきました。そして彼らは一万八〇〇〇年ぐらい前から土器も作っています。日本の縄文土器も世界最古の一つですけれども、長江流域の土器も世界最古の土器です。土器を作って、そしてお米を作っているということがわかった。湖南省の玉蟾岩遺跡は桃源郷のような風景です。洞窟があって、この中に住んでいた人々がお米を作っていました。

野生の籾と栽培の籾はどうして区別できるかというと、稲籾の底の部分を見ていただいたらわかります。野生稲の底の部分はつるんとしている、一方、栽培稲の底の部分はギザギザです。それを見ることによって、どっちが栽培か野生かというのがわかります。籾は熟すると野生のものは全部バラバラと実が落ちます。実が落ちたのでは食べられないでしょう。だから突然変異によって、この野生の稲、オリザ・ルフィポゴンの中で脱粒性のないもの、つまり実の落ちにくくなったものを人間が選ぶわけです。人間が選んでいる間に籾殻が落ちないものができるわけです。籾殻が落ちないから、脱穀するわけです。それでここがギザギザになっている。これでこちらが栽培、こちらが野生というふうに区別できるわけです。

稲作の起源は
1万4000年前

17000年前の土器

図１　稲作は１万年以上前に始まる

図２　湖南省城頭山遺跡　6000年前

その一万年以上前に始まった稲作をベースにして、都市文明が、約六〇〇〇年前に長江流域で誕生しているということがわかってきました。これもいろいろ議論がありました。我々が長江文明を発見したというニュースが新聞に載りました。そうすると日本の考古学者からいろいろ批判されました。梅原先生だって考古学者ではありません。私は環境考古学者と言っているけれども、純粋の考古学者ではありません。考古学のコの字も知らない人間が長江流域に都市文明があるということを言い出したんです。デタラメを言っていると当時の新聞で批判されました。

図2は我々が発掘した六〇〇〇年前の湖南省の城頭山遺跡です。周辺が城壁で囲まれています。中国人と共同して発掘しました。この発掘報告書が昨日出たばかりです。一二〇〇ページの報告書が出ましたからもう日本の考古学者は文句を言えないと思いますが、これが出るまではいろいろ言われました。我々はこれが都市の遺跡であると言った。しかし米を食べて魚を食べている稲作漁撈民が、文明を持っているはずがないと、皆思っています。我々が文明と言うと、ヨーロッパ文明、アメリカ文明、一番の古代文明だったらエジプト文明、メソポタミア文明、インダス文明、黄河文明でしょう、これが四大文明と言われている。これらの文明はパンを食べてミルクを飲んで肉を食べる。羊やヤギを飼う文明です。こういう人々だけが文明を持っていて、お米を食べて魚を食べる国は文明を持っていないと長いこと考えられていたわけです。我々は、「いやそうじゃない。米を食べて魚を食べた人間も、メソポタミア文明と同じように六〇〇〇年前から文明を持っていた。」こういうふうに初めて言った。そしたらそんなことはないという批判を日本の考古学者からいっぱいいただきました。

湖南省の城頭山遺跡では城壁をつくって潅漑用のため池をつくるんです。潅漑をするためには人間が一緒に共同で労働しなければいけない。水を潅漑利用するということが、都市というものを誕生させる一つの大きな要因になるわけです。遺跡を発掘しますと、全部、焼成レンガでできた基壇が発見されました。その焼成レンガの上に建物があります。外側は列柱回廊の様式をとり、柱だけがあっ

て、真ん中が壁です。その建物の中には、全く何もない。これは一体何だろうと言って、いろいろ研究したら、中で食事したり、料理した形跡がありませんから、日常の建物ではありません。おそらくこれは城頭山遺跡の首長が祭政を執り行った祭政殿であったであろうと考えられます。

さらに、近くに鶏叫城遺跡がありますが、これは五五〇〇年前の遺跡です。この遺跡は三重の環濠に囲まれていまして、真ん中に宮殿のような建物があるわけです。その面積は一五万平方メートルと非常に大きなものです。

それ以前に私たちが発掘しました四五〇〇年前の四川省の龍馬古城宝墩遺跡は、長軸が一一〇〇メートル、短軸が六六〇メートルという長方形の城壁に囲まれた巨大な都市遺跡でした。この城壁の幅が大体四〇メートルぐらい、高さが一〇メートルから一五メートルぐらいです。あまりに大きいものですから、皆、自然の山だと思っていた。ところが衛星写真で上から見ると長方形の巨大な城壁の一部であるということがわかりました。この遺跡は面積が六六万平方メートルです。

さらに、四五〇〇年前、湖北省の石家河遺跡とか、あるいは浙江省の良渚遺跡では、一〇〇万平方メートル以上の巨大な遺跡が出現する。一〇〇万平方メートルというのは、メソポタミアの都市のウルクの町に匹敵する大きさです。ウルクという都市は湖北省の石家河遺跡とほぼ同じくらいです。ウルクの遺跡はレンガとか石で作っていますから、六〇〇〇年前の都市の遺構が、そのまま現在まで残っているわけです。ところが長江の巨大遺跡は泥と木でできていますから、泥と木でできた都市の遺跡というのは跡形も無くなっているわけです。しかも中国の農民は城壁の土を全部持っていって、田んぼの客土に使いますから、元々あった城壁なんかもほとんど無くなっているわけです。巨大な遺跡の痕跡を知ることができるのは環濠です。その環濠を発掘することによってしか当時の遺跡の規模を知ることはできないわけです。

メソポタミアの場合は都市といいますと、王がいて、そして物を交易する、交易とか消費のセンタ

ーですけれども、稲作漁撈社会における都市はそういうものではなくて、生産というものと都市が非常に深く結び付いているはずです。畑作牧畜型のメソポタミア型の都市は、すべてが物を交流したり消費したりする都市ですが、長江では、王が例えば自ら種籾を分配したのではないでしょうか。日本の天皇陛下は今でもお田植えなさるでしょう。畑作牧畜型のメソポタミアの王は自分で種籾を蒔くことはしません。何故陛下は今でもお田植えをなさるのか。それは稲作漁撈型の王というのは稲作の豊饒を祈る儀礼をやる、この城内でやるわけです。そのために人々が集る。そこが畑作牧畜型の都市とは根本的に違うところです。

この長江の人々が崇拝したものは何かというと、一つが太陽です。太陽が一番重要です。太陽が東の空から昇って西の空へ進んでいく。その季節の運行に応じていつ種籾を蒔いたらいいか、いつ田植えをしたらいいか、いつ稲刈りをしたらいいかを判断します。その太陽は鳥によって運ばれている。図3は七〇〇〇年前の浙江省の河姆渡という遺跡から見つかった象牙に彫られた彫刻を石に拡大コピーしたもので、五輪の太陽を二羽の鳥が運んでいる。古代の人々は、太陽は鳥によって運ばれていると考えました。そして太陽は朝生まれて夕方死にますが、同じように蛇も脱皮をします。ですから命が生まれ変わるということです。その太陽は、朝、東の空から生まれて、西の空で死ぬ。しかしまた翌朝、生まれ変わる。こういうのが稲作漁撈民の大きな世界でした。

つぎに柱を大事にします。何故、柱を大事にするかというと、柱は天と地をつなぐものです。天地の結合のシンボルが柱です。稲作漁撈民は、天地を結合し、豊饒の儀礼を行った。

さらに玉を崇拝しました。なぜ玉を崇拝したか、私は長いことわかりませんでした。梅原先生はその玉を見た瞬間に手が震えるほどに興奮されました。私は何回見ても感動しないわけです。「何でこんな石ころがいいんだろう。金銀の方がよっぽど光輝いていていいじゃないか」と思っていました。何故、長江文明の人々は、金銀財宝ではなくて玉を崇拝したのか。玉を見られたことありますか。感

動された人はいますか、ここで。玉を見て、感動されましたか。しなかったですよね。大体、金と玉とどっちやるかと言ったらやっぱり金をもらうでしょう。大体皆、そうです。樋口隆康という考古学の偉い先生が、なぜ中国の人は玉が好きなのかというと、枕にして抱いていると、段々、玉が温かくなってくるという。枕にすると非常に良い、だから枕にしたんじゃないかと。その大好きなところが日本人にはわからない。なぜ中国の人が玉を好きなのかわからなくて、私は長いこと悩んでいました。ある時、『山海経』という長江の神話がありますが、初めから読んでいった。そこに何が書いてあるかといったら、ここにはこんな動物がいる、こんな怪獣がいるとかいろんな面白いことが書いてありますが、最初に、何々山には何々玉が採れると、こう書いてあるわけです。何々山には何々玉。つまり山というのは、玉というものと深い関係がある。玉というのは山から流れてくる川原で取れるわけです。そこで玉というのは山のシンボルではないかと考えました。そしたらすべてが解けたんです。つまり稲作をやるためには水がいるでしょう。水はどこから来ますか。山から来ます。山を、聖なる山を集落に持ってくることができないから、豊かな水が来ますようにと願って、その聖なる山で取れる玉を集落へ持ってくる。

図3　長江文明の人々は太陽・鳥・蛇・フウの柱・そして玉を崇拝した

山というのは、天地の懸け橋です。天と地を結合するということに最大の価値を置いたわけです。稲作漁撈民が柱を大事にしたというのはなぜかというと、山というのは天に向かう梯子です。会津磐梯山の、あの磐梯とい

うのはどういう字を書くか知っていますか。磐というのは岩でしょう。梯は梯子です。会津磐梯山というのは岩の梯子なのです。どこへ行く梯子か。天と地をつなぐ梯子です。だからその山が、天地を結合するというのは、稲作漁撈民にとってはものすごく重要です。その山のシンボルが玉です。そういうふうに解釈すると、すべてが解けるんです。

私は昔、吉野裕子先生にお会いしました。ギリシア・ローマでよく見た二匹の蛇が絡み合っている図柄、それが一体何だろうと考えていてわからなかった。吉野裕子先生が、伊東俊太郎先生の研究会に出られた時に、「安田さん、しめ縄は蛇ですよ」と、こう言われた。それ聞いたとたんにもう全部わかったんです。しめ縄は蛇。つまり二匹の蛇が絡み合っているわけです。ギリシア・ローマの世界では何でこんなものを、大切な壺とかに描いているんだろうか。それがずっと謎でした。吉野先生が「しめ縄は蛇だ」とおっしゃった。その一言で全部わかった。つまりしめ縄というのは実は二匹の蛇が交尾している姿です。それが聖なるものであり豊饒のシンボルです。なぜ豊饒のシンボルかというと、これは交尾の時間が非常に長く、そして蛇というのは脱皮をします。脱皮は命の再生のシンボルで豊饒のシンボルです。交尾の時間が長い、性のエネルギーが強いというのは、たくさん子供を産む原点になるわけですから、古代の人々はこれを崇めたんです。

玉は山のシンボルだった。図4の良渚の玉琮という玉は丸と四角がセットになっているわけです。中国の古典『淮南子の天文訓』の中で言われていますが、丸は天という意味です。地は方、四角です。だからこれは天地の結合を意味しています。その隣に細かい模様がある。これを見て稲盛先生は感動されたんです。これは五〇〇〇年前の玉で、その細かい模様は直径が二センチメートルです。この二センチメートルのものを拡大しますと図5のようになります。この浮き彫りですが、アメリカインディアンのような鳥の羽飾りをつけた人々が、トラの目に触っているんです。体には全部渦巻きの文様が入っています。足は鳥の足です。鳥人間です。だから彼らは鳥を崇拝した。鳥は天地を往来す

る。そしてトラの目に触っている。体には再生と循環の渦巻きの文様が書かれている。直径二センチメートル、これを五〇〇〇年前に彫ったんです、細かい模様。この浮き彫りをどうやって作ったかということを一生懸命研究されましたが、稲盛先生は、この技術を復元できなかった。五〇〇〇年前の人々がどうやってこの浮き彫りを、しかもこんな細かい模様を、何で彫ったんでしょうか。ダイヤモンドカッターやレーザーで彫るんでしたらわかります。その細かさ。これが稲作漁撈民の特色です。細かいことができるんです。現在、世界の半導体生産の八割は稲作漁撈社会で作っています。稲作漁撈をやることによって、非常に繊細な感覚が養われるのです。

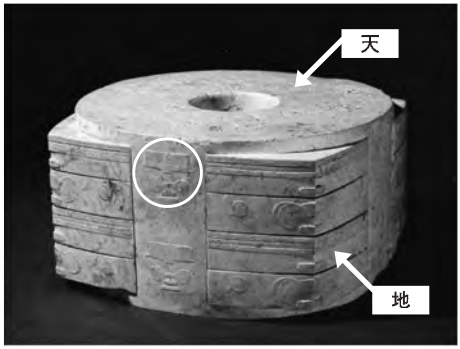

図4　長江文明は玉器文明だった
玉は山のシンボルだった

図5　稲作漁撈民は山と鳥を崇拝した

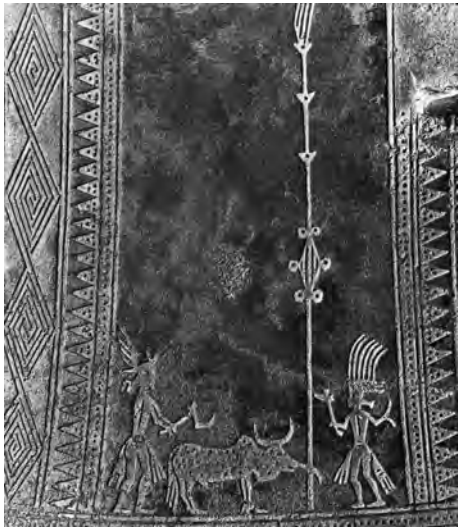

図6　柱を崇拝　水牛を生贄

それからすでに述べましたように柱を崇拝している。図6の絵を見たらアメリカインディアンだと思うでしょう。これは紛れもなく中国のものです。羽飾りの帽子をかぶった人が、今、水牛を生贄にしている。柱の先には鳥の羽が飾られている。柱とそれから鳥。それから馬ではなくて牛を大事にする。馬を大事にするのは黄河の文明ですけれども、牛を大事にするのは長江のお米を食べて魚を食べる、そういう人々の文明です。

三、四二〇〇年前の気候変動と東アジアの民族大移動

この文明が今から四二〇〇年ほど前に崩壊します。何で崩壊したか。それは大きな気候変動が四二〇〇年前にありまして、それがインパクトとなって長江文明が崩壊します。長江文明の城頭山遺跡、鶏叫城遺跡。そして四五〇〇年前に突然、龍馬古城宝墩遺跡のように巨大な遺跡が出現してきます。それが四二〇〇年前の気候変動によって、突然、恐竜が死んでいくように崩壊します。その気候変動が背景となって、東アジアで大動乱が起こったということが最近わかってきました。どういう動乱かというと、民族の大移動です。四二〇〇年前に気候が寒冷化すると、西の方から白色系の人種が――羊とヤギを連れた遊牧民が、大挙してやってきました。そして周辺にいた人々を蹴散らすんです。ど

うしてわかったかというと、ここ山東半島の付け根――これは黄河文明の本拠地です。その山東半島の付け根に臨淄という遺跡があって、そこから六〇体ぐらいの人骨が出ました。その人骨のＤＮＡを王さんが測ったところ、六種類のミトコンドリアＤＮＡの構成比は、二五〇〇年よりも前は紫色が多い。ところが二〇〇〇年以降は紫色がぐっと少なくなって、白色とかあるいは灰色っぽい部分が多くなります。この紫色が多い部分の人というのは、今中国にはいません。どこにいるかというと西の方のウイグルにいるんです。さらにもっと西の、現在のフィンランドとかドイツ、こういった所の人々がこの紫色のミトコンドリアＤＮＡを持った集団です。ということは、二五〇〇年以上前の黄河文明の本拠地には白人が住んでいたということです。それで私が、孔子は白人だったと言ったら、ひどく叱られました。中国の北方の人はものすごく体格が大きい。きっと白色系の人が大挙してやって来たのではないか。そうすると長江流域に住んでいた人々が追い出されるわけです。そして南や日本列島へと逃げていく。こういう大動乱が今から四二〇〇年ほど前に引き起こされます。その事は司馬遷の『史記』にも書いてあります。北から来た人々が南の長江流域にいた楚を攻めて南陽に移すとか、あるいは始皇帝の時代に楚や越の国を滅ぼし長江流域にいた人々を追い出すということが、黄河流域に住んでいた人々にとっては最も重要だった。黄河流域は水がない、食物がない。ところが長江流域は水が豊かで、そして食物がいっぱいある。黄河流域の環境が悪くなった時に彼らは南へ行って、長江流域の人々を蹴散らします。

中国では、現在、黄河流域に水がありません。「南水北調」と言って、長江の水をどんどん北へ持っていっていますけれども、破綻をきたすのは時間の問題です。中国は今、首都を北京から南京に移そうと言っています。つまり地球温暖化の中で水がなくなりますから、中国文明の中心は必ず長江流域に移動します。かつて四二〇〇年前にあった事がもう間もなく再現される可能性があるわけです。

図７に示すように四二〇〇年前以降、気候が寒冷化してくると黄河流域に住んでいた人々は生活で

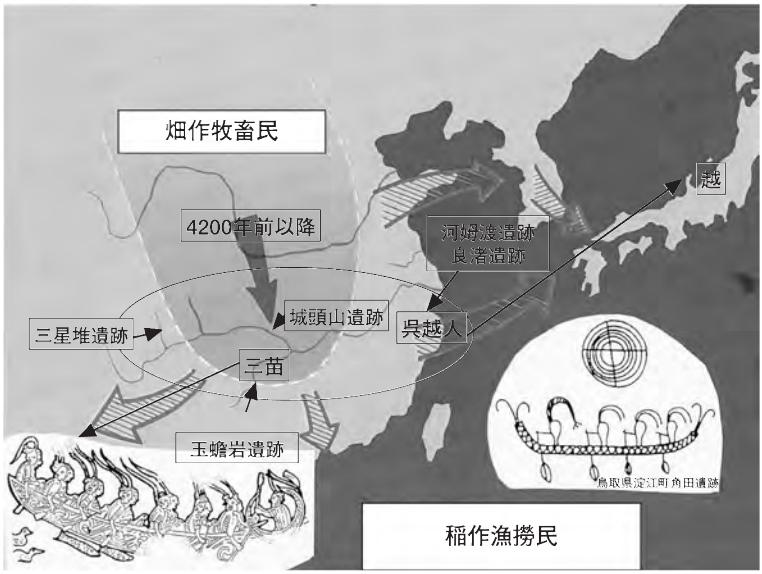

図７　長江文明は畑作牧畜文明にやられた

きなくなり、大挙して南下するわけです。長江流域には稲作漁撈民が住んでいましたが、北からやって来た人々と戦争して負けるわけです。なぜ負けたかというと、北からやってきた人は、馬に乗って、既に金属器を手にしていた。馬に乗って金属器を手にしていた人間が、金属器を持たない、馬を持たない長江の人々と戦争したら、それは彼らが勝ちます。彼らは肉を食べますが、肉を食べると頭の中にアドレナリンが溜まります。そうすると非常に戦闘的になります。長江流域の人々は魚を食べていた。魚を食べていると頭の中には神経伝達物資でノルアドレナリンというのが溜まるんです。そうすると優しくなります。戦闘的な人間と優しい人間が戦ったらどうなるか。それは決っています。それで畑作牧畜民の人々は大挙して南下して

彼らを蹴散らしているんです。そして蹴散らされた人々はどこへ行ったかというと、雲南省や貴州省の山の中へ逃げるんです。図7は一九九七年の段階で初めて出した仮説ですが、今やそれが立証されつつあります。

四、雲南省滇王国と少数民族の文化に残る長江文明の遺産

長江流域に暮していた人々は、雲南省や貴州省の山の中に逃げて行き、そこで滇王国という王国をつくるんです。これが長江文明からの逃亡者たちが雲南省でつくった王国です。見てください、図8のしめ縄、これがしめ縄の原型です。彼らは牛を崇拝する。その滇王国の末裔が、今の雲南省や貴州省に住んでいるミャオ族、あるいは欠端先生が研究されているハニ族です。彼らの顔は漢民族の顔とは違います。非常に気品のある顔をしています。彼らはやはり柱を崇拝します。それから鳥を崇拝しています。お祭りの時には柱の周りを皆がダンスをしながら踊る。そして銅鼓という太鼓を打ち鳴らします。その太鼓の真ん中には太陽がちゃんと彫刻されています。ですから、太陽を崇拝して、柱を崇拝して、鳥を崇拝する、長江文明の世界観をちゃんと彼らは今でも持っているわけです。

図8　注連縄の原型は蛇　李家山遺跡

五、カンボジア、プンスナイ遺跡の発掘にみる長江文明の遺産

先ほどご紹介いただきましたように、私はカンボジアから帰ってきたところです。なぜカンボジアに行ったかというと、この雲南省にいた人々、ミャオ族やあるいはハニ族とかイ族、こういった少数民族の人々が、長江文明が崩壊したことによって、雲南省や貴州省の山の中に追われてきた。ところがそれだけでは済まずに、彼らはさらにメコン川やあるいはイラワジ川、こういう大河を下って、東南アジアへ行ったのではないかという仮説を持っているわけです。それを立証するため今年からプロジェクトを始め、メコン文明学術調査団というのをつくりました。長江文明が崩壊した後で、雲南省、メコン川の源流が雲南省です、それからこのイラワジ川、この源流もやはり雲南省、それからハノイに行くホン川、この源流も雲南省です。ですからここにいた人々が船に乗ればいっきにベトナムやあるいはラオス、さらにはカンボジアに行くことができます。だから長江流域を追われた人々は、一旦は雲南省や貴州省の山の中に逃げますが、さらに船でメコン川を下っていったのではないかという仮説を私は持っているわけです。それで今回、発掘に行きました。麗澤大学というのは不思議な所で、私はこの稲作の起源が一万四〇〇〇年前に始まるという話も初めてここ、比較文明文化研究センターでさせていただきました。本日これからお話することは、日本の誰も聞いていない話です。何故かというと二月二八日に帰国したところですから。その間忙しくて講演もやっていませんから、カンボジアの話は皆さんが初めて聞かれることになったというわけです。

メコン川は巨大な河です。美しい河ですけれども海みたいなものですから船があれば一気に下れます。二〇〇七年の一月一三日から二月二八日まで、このカンボジアの学術調査にまいりました。ちょうど旧正月でした。これはプンスナイ遺跡に行く途中によく見た風景ですが、人豚一体と言います

か、オートバイに豚を逆さまに積んで、旧正月に豚を売りに行くわけです。こんな細いタイヤでこのような大きな豚と人間を実にバランス良く運んでいると思います。毎日この光景を見て、発掘現場まで行きました。

図9がトンレサップというカンボジアの大きな湖です。この湖は、乾季と雨季で水位の大きな変動があります。雨季ですとこの黒い部分まで水がきますが、乾季はこの部分にしか水は行きません。大きさは琵琶湖よりもはるかに大きい。この巨大な湖の北側にアンコールワットとかアンコールトムという、皆さんがよくご存知の遺跡があります。アンコールワットとアンコールトムという遺跡は一〇世紀頃に突然繁栄するわけです。アンコールワットというのは一〇世紀頃に巨大な寺院が出来る。今まで文明のない所に突然アンコールワットやアンコールトムの文明が誕生したと言われておりましたが、そうではない。文明というのは、ある日突然、今までゼロの所に巨大なものが出てくるわけがないんです。

グーグルを見ていたら、このアンコールワットの西八〇キロメートルのところに何か円い、自然の地形では出来ないものが見つかった。私は環境考古学者ですから、パッと見た瞬間にわかります。自然ではこんな円いものは絶対できない。火山か何かでないとこんな円い地形は出来ません。直径三キロメートルの巨大な円形のものです。これを見た瞬間、これは遺跡だと思いました。

現地に行きました。そしたら髑髏が積んであるじゃないですか（図10）。ああこれはポルポトの時に虐殺されたあれだなあと思って「ポルポトですか」と言ったら、いやいや違うと言うんです。「どこから出てきた、これ」と僕が言ったら、何も言わない。おかしいなあと思って、裏の方に行ったら穴ぼこだらけです。その穴から出てきたと言うんです。これは二〇〇〇年ほど前のお墓です。そのお墓を盗掘して、そこから出てきた金属器とかあるいはビーズとかいろんなものを売るんですが、人骨は売るわけにいかんでしょう。ここは敬虔な仏教徒の国だから、人骨を粗末にしてはいけないという

図 9　トンレサップ湖とプンスナイ遺跡

図10　プンスナイ遺跡の人骨の山

ので集めているわけです。中にはもう粉々になって壊れてしまったものもありますが、残り具合の良いものを集めてお祀りしているわけです。ということはもうこれは明らかに遺跡であるということがわかった。それでここを発掘することにしたわけです。

発掘するとなったら大変でした。いろんな大臣が来てお祭りをしてセレモニーをするんですが、遺跡に、最も聖なる場所といわれているマウンドがあって、その上でやりました。この辺りはセレモニーの前にいつも歩き回って、土器片が落ちてないかとか、いろんなことを調べていた所です。ところが大臣や日本大使が来るとなると、皆、地雷探知機で地雷があるかないかを検査するんです。毎日歩いている所ですから、そんな所には地雷はないだろうと言っても、いやここは必ずあるはずだと言って、検査するんです。一体私たちの命は何だったんだろうと思いました。大臣たちが来るとなったら、途端に検査するんですから、ひどいものです。そして結局一つ見つかりました。全然知らずにうろうろ歩いていたところから見つかったんです。

図11　発掘ステーションの台所

セレモニーを済ませて発掘をしました。図11は我々のステーションの台所です。家を三軒借りまして、日本人は一〇名ぐらい、カンボジアの首都プノンペンに大学がありますけれども、そこの大学生を四〇名ぐらい、人夫は一〇〇名ぐらい。人夫さんには一日大体五ドルで、一〇〇人雇っても一日に五〇〇ドルです。それで発掘をやりました。

これは我々の食事をつくっているところです。一番暑い時期で四〇℃近くあります。冷蔵庫もありません。電気が

来るのは六時から一〇時の間です。夕方の六時から夜の一〇時までしか来ません。たった四時間しか電気はない。

貧い人のおばさんやアシスタントの人たちが毎日ご飯をつくってくれるわけです。冷蔵庫を維持するだけの電気はありません。市場に行って買って、そしてその日に食べるということをしないと腐ってしまいます。それでも誰もお腹を壊しませんでした。

稲作漁撈の都市だから環濠があるだろうと思っていました。先ほど申し上げたように鶏叫城遺跡という五五〇〇年前の湖南省の城頭山遺跡の南にある遺跡も環濠によって囲まれていました。稲作漁撈をやるためには環濠がなければいけない。それが重要な水運になっているわけです。その環濠があるはずだと思って調べたらやっぱり窪みがあるんです。そこをまず掘ってみました。そしたらちゃんと環濠が出てきました。これが環濠です。ここに環濠の跡がきちんと出てきて、かつてここに巨大な水路があったということがわかってきました。

遺跡の中心には聖地と言われたマウンドがありました。高さは七メートルぐらい。そのマウンドを掘ると下はお墓でした。中国式の版築という工法で土を固めて、その上にお墓、マウンドが造られていて、その下に主体部が埋っているわけです。主体部は、今回、時間がなくて掘れませんでしたけれども、高さ三メートル五〇ぐらいのです。主体部の脇のお墓は、陪弔と言って、傍に埋葬された人たちです。そこからもたくさんの物が出てきました。

日本の高橋大使は二回も、遠い所わざわざプノンペンから見に来てくださいました。

このお墓は六世紀になって、寺院がその上に建てられました。多分カンボジア最古の寺院だと考えていますが、その寺院の礎石が方形に残っていました。かつての聖なる場所が、お寺として利用されている。アンコールよりはるかに以前の寺院跡です。

その人骨を見ていただくと、カンボジアの人と違い、頑丈です。しかしどういう人かわかりませ

ん。出てきた物を見てびっくりしました。これは黒陶土器と言います。私が城頭山遺跡で発掘したものと全く同じ物です。見た瞬間に、あっ、もうこれは長江から来た人じゃないかと思うぐらいです。中国文明の様式を非常に強く示しています。ここに太陽の模様が描かれています。

こういう注口土器はこれまでせいぜい一〇世紀ぐらいのものとみなされていました。ところが黒陶土器と同じ時代から出ています。これははるかに古く紀元前五〇〇年あるいは紀元前一〇〇〇年にさかのぼる可能性が出てきました。今までの東南アジアの土器の編年というのはいい加減で、年代測定がほとんどなされていません。今回は土器の編年そのものも確立されると思います。

これは下層階級の人の人骨ですが、こういう壺をお腹の上に置いたり、あるいは金属片があったりしていますが、下層階級の戦士のような人たちです。ところが上層階級になると、いっぱい青銅の腕輪をしています。腕にはびっしりと青銅の腕輪がはめられています。ビーズとか玉、そういったもので着飾っている。明らかに階級差があるということがわかってきました。これは出てきたものの一部ですけれども、ビーズとかガラスです。これはラピスラズリ。ラピスラズリというのは、今、アフガニスタンでしか採れません。そういう遠方との交易があったんです。

ひょっと地元の子供の胸元を見たらビーズでいっぱい飾っているんです（図12）。これどこから出たのと言ったら、お父さんからもらったと言うんです。お父さんはどこから取ったか、その辺の墓から盗んできたわけです。ひょっと

図12　子供の胸には盗掘されたビーズが

したら村人はものすごい物を持っているんじゃないかなと思って、徹底的に探しました。そしたらこんな物が出てきました。これは水牛の顔、ここに目玉があって角があって、そして鈴です。青銅の鈴です。

おばあさんの持っていたものを全部出してもらいましたが、ガラスの玉とかビーズとか素晴らしいものがある。これは僕らの発掘では出ませんでしたけれども、玉です。玉のペンダントのようなもの、それから金銀もありました。金の耳飾りだとか玉ですね。こういうものを皆持っています。盗掘した数は数万点以上です。それでもまだ未盗掘の所がいっぱい残っています。そのお墓の数を見ればそこが都市であったということが判るわけです。先ほど申し上げたように、黒陶という土器が見つかったことによって、四二〇〇年前の大きな気候変動があって、北から畑作牧畜民がやってきて、長江流域にいた人々が追い出されて雲南省や貴州省に行って、その一部がカンボジアあるいは東南アジアに流れて行ったということが、推測できるわけです。

これに対して、海岸にいた人々はどこへ行ったか。図7に示しましたように彼らが実はボートピープルになって日本に来たわけです。だから富山を越中、福井県を越前と言いますが、この越は何かというと呉越の越であるというのが私の考え方です。これは鳥取県の淀江町の角田遺跡という所から見つかった弥生時代の土器ですが、羽飾りをつけた人、太陽、出雲大社のような建物が書かれていますが、同じようなものが雲南省にもあります。雲南省のは、ここに羽飾りをつけた人々がボートをこいでいます。ですから一方の人々は雲南省や貴州省、それからカンボジアの方、メコン川の流域に逃げて行った。そして一方の人々はボートピープルになって日本に来たということです。その証拠が、例えば、これは福岡県の珍塚古墳です。これ太陽の模様です。船先に鳥が止っているでしょう。鳥というのは長江文明のシンボルですが、鳥の水先案内によってボートピープルになった人々が来たということです。

こちらは雲南省の滇王国の石寨山遺跡の銅鼓です。この銅鼓には同心円の模様と三角の模様がいっぱい書いてあります。先ほど言ったカンボジアのプンスナイ遺跡でも、同心円の模様と三角の模様があります。これが重要です。稲作漁撈民にとっては同心円というのは太陽のシンボルです。三角は何のシンボルかというと蛇です。日本にも古墳時代の埴輪に、三角のたすきをした、三角の模様をした埴輪がありますけれども、これは蛇のシンボルだというふうに考えていいと思います。これがカンボジアのプンスナイ遺跡、それから雲南省、そして実は日本でも見つかっているわけです。これは福島県の磐の中田横穴古墳に出ています。こういう三角の模様は大事です。それから同心円、これは太陽です。

古墳時代の文化というのは、朝鮮半島経由で来たと考えられています。高句麗だと思っています。今の日本の考古学者は、弥生時代の稲作はひょっとしたら長江から来たかもしれないと認め始めました。しかし古墳時代に関しては朝鮮半島経由の北方のものであるということに対して疑う人はほとんどいません。しかし古墳時代においてさえ南方系の長江流域からの文明の影響、それはカンボジアにもつながるのですが、南からの文化の影響はあるということです。

こういうS字紋。これは雲南省の石寨山遺跡から出たものですが、S字紋というのは蛇です。これと同じものが例えばここにもあります。Wスパイラル、S字紋。これと同じ物、隼人舞の隼人のシンボルがこれです。ですから鹿児島の隼人の人々と長江流域とは深い関係がある。これは七〇〇〇年前の縄文時代早期の鹿児島県の垂水遺跡から出たS字紋ですが、七〇〇〇年前にもう既に長江との交流があった可能性があるんです。こうしたことを前提として、日本の神話を考えてみたいと思います。

六、日本神話と長江文明の深い関係

今までは日本の神話は全部、朝鮮半島経由で考えられてきました。高千穂の峰とかあるいは鹿児島の笠沙町という所に瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）が漂着されますが、全部でたらめだとされてきました。

本来は朝鮮半島に近い北九州こそが日本の神話のはじまりであるにもかかわらず、日本の古代史家でも、南九州にあるのは古代の人々が方位を間違ったからだと言う人もいます。我々は方位を間違います。何故、間違うか。ＧＰＳなどによって、今や地図を見なくなって、ナビに言われる通り動いているでしょう。今の我々は機械化され方位を失いがちですけれども、古代の人々は方位を間違うということはまずありません。航海する時には、北極星だったらその北極星の方向に動きますから、古代の人々が方位を間違って北を南と間違ったり、東を南と勘違いするというようなことはまずない。そういうことを実しやかに日本の古代史家、戦後の古代史家は論じてきた。南九州に日本神話の故郷があるのはおかしいと。

日本神話では九州に漂着する。これは当然です。高天原から瓊瓊杵尊がどこへ漂着したか。この黒瀬海岸の笠沙町という所に漂着するんです。今、石碑が立っています。その瓊瓊杵尊はここにやって来て木之花咲夜姫と結婚するわけです。その時にアマツミシルシノカンダカラという剣を引っさげてやって来たと書いてあります。そのアマツミシルシノカンダカラという剣はどういう剣かというと、これは素戔嗚尊（スサノオノミコト）が高天原で八岐大蛇（ヤマタノオロチ）を退治した時に見つけた天叢雲（アメノムラクモ）の剣です。天叢雲の剣を瓊瓊杵尊が高天原から日本に来る時に、天照大神がこれを瓊瓊杵尊に差し上げた。それを引っさげて日本にやって来たというのが、『日本書紀』が

語る日本神話です。図13がそれをまとめたものです。そのアマツミシルシノカンダカラ、つまり八岐大蛇の尾っぽから出た剣が、第一〇代の崇神天皇の時に何か混乱が起こったため、大和の笠縫村という所に置かれます。その後、第一一代の垂仁天皇が伊勢に移されて、そして大倭姫の命のところで長いあいだ保管されて、その大倭姫の命が日本武尊にお渡しになるわけです。日本武尊はその大倭姫の命からそのアマツミシルシノカンダカラ、つまり天叢雲剣をもらって、そして蝦夷征伐に行くわけで

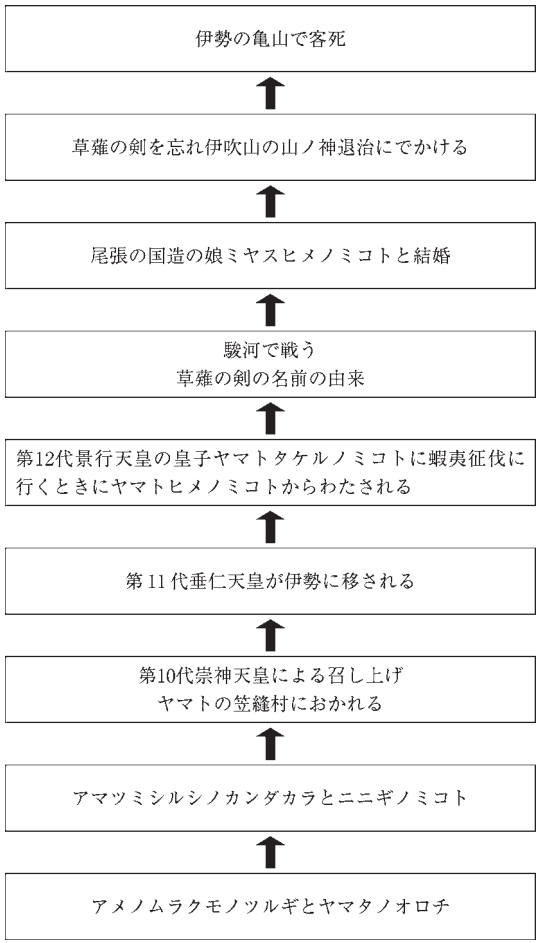

図13　草薙の剣の由来

す。駿河の地で蝦夷の人々に囲まれた。それでその草薙の剣で草を焼き払って助かった。だから草薙の剣になった。日本武尊は、その後、尾張の国で美夜受比売（ミヤスヒメ）と結婚します。結婚して、伊吹の山の神の退治に行きますが、その時に草薙の剣を忘れていったわけです。それで返り討ちにあって、伊勢の亀山で三重になって死んだという。これが誰でも知っている物語です。この日本武尊が使った草薙の剣、これは今の熱田神宮にあります。そのご神宝のルーツはどこかというと、これはスサノオノミコトが八岐大蛇の尾っぽから見つけた剣です。するとヤマタノオロチというのはどんなものか。これは人を何回も飲み込むだけの巨大な大蛇です。そんな大蛇、日本にはいません。だから古代史家は、そんな見たこともないような大蛇を妄想して、いい加減な虚構を『日本書紀』は書いている、だからこれは歴史学の対象にするものではないと言って、戦後断じてきた。戦後じゃない、もっと前から断じてきたわけです。

日本にはヤマタノオロチのような大蛇、いないのではないか。いないものを頭で妄想して、いい加減な物語を書いていると、こう言った。ところがその大蛇はいるんです。大蛇がいる所は雲南省です。雲南省には、マンという大蛇がいます。直径七～八メートルぐらいの、羊などを一呑みにできるぐらいの大蛇がいるんです。その雲南省の人々は、先ほど申し上げたように、かつて四二〇〇年前以前には長江流域に住んでいた。ところが四二〇〇年前に北方から黄河流域の人々が攻めてきて、そのため雲南省や貴州省に逃げて行く。一方がボートピープルになって日本に来たと申し上げた。その雲南省にはどういう大蛇がいるかというと、マンという巨大な大蛇がいます。

これは雲南省の滇王国の貯貝器です。ここに貝のお金を蓄えるわけですが、貯貝器にいろいろな模様がある。図14を見て下さい。これをクローズアップしてみます。当時の生活が青銅で彫像されているわけです。裸の女性か男性かわかりませんが、多分女性でしょう、髪の毛を柱に結わえられて丸裸です。この柱の左側に、二匹の大蛇が絡み合ってそして柱に結わえられているわけです。これはこの

人がこの大蛇の生贄になるところです。滇王国では人間を大蛇の生贄にするということが現実に行われていたわけです。日常生活がきちんと克明に書かれているわけですから。これは巫女だったかも知れません、シャーマンだったかも知れません。天候が悪い、作物が取れない。それをシャーマンがお祈りをする。しかし全然効き目がないと『金枝篇』のネミの王のように、この巫女が生贄になってそして王権の交代が起こるわけです。これが王権の交代の儀式だと思われるのは、ここに籠に乗った人が平然と座っているでしょう。古い勢力を失った巫女、あるいは王の後に、この女性が座っている。実は滇王国というのは女王国です。卑弥呼と同じ女王の国です。この女王が籠に乗って平然とそれを見ている。これは王権交代の儀式です。前王あるいは女王は、この大蛇の生贄になるということが現実に行われていたんです。城頭山遺跡という六〇〇〇年前の遺跡がありますが、その遺跡が営まれた時代には、象の骨とかサイの骨がいっぱい出ています。だから長江流域には、今は雲南省にしかいないけれども、かつては大蛇がいた。その事を知っていた人々が日本に来て、ヤマタノオロチの物語を書いたんです。そう考えるのが当たり前だと、私は思います。勝手に、貴重な紙に、頭で妄想したことを書きますか。妄想だと言えば何でもわかると思ったら間違いです。やはり『日本書紀』に書いてあることをきちんと読む。ヤマタノオロチの物語の始まりは、長江流域に住んでいた

図14　滇王国貯貝器

人々が、その記憶に基づいて書いた可能性があります。

そのニニギノミコトが日本に来られて、その子供の海幸と山幸の物語ですが、海幸と山幸が喧嘩します。海幸に釣り針を借りた山幸は、その釣り針をなくす。それで海幸は怒るわけです。釣り針返せ。それで山幸が豊玉彦の所へ行って、釣り針を探して、そこで豊玉姫と出会うわけです。名前は大事です。豊玉です。山幸が豊玉姫と会う時のことはどういうふうに書いてあるかというと、この山幸が口から玉をぽんとこの瓶に落とした。だからこういう絵が書いてあるんです。今の若い人は『古事記』や『日本書紀』を読んでいませんから、この絵を見ても全然意味がわからないでしょう。彼、青木繁は『日本書紀』とか『古事記』を良く知っているんです。だからこれを描けるんです。これは桂の木です。桂の木というのは、中国名で連香樹と言います。長江の人々が最も愛した木は楓の木です。これは日本にはありません。第四期に入って絶滅しましたから、日本にはフウの木はありません。その中国名は楓香という。私たちは城頭山遺跡を発掘して一〇〇〇点近い木材片を分析しました。そしたら八〇〇点近くがフウの木でした。楓の木を知っていますか。東京あたりですと、アメリカフウと言って、秋になると葉が真っ赤に色づきます。先ほど見せたミャオ族が、芦笙柱という柱を立てますでしょう。これはフウの木で作らないと駄目です。絶対にフウという木を大事にするんです。

ミャオ族はこういう伝承を持っています。自分たちは、かつて長江流域に住んでいました。ところが、ある時、北方から黄河流域の人々が攻めてきた。我々の先祖は戦ったが戦争に負けて、我々の先祖の赤い血がフウの木の葉っぱについて秋になるとフウの木は真っ赤に色づくんだ、と。皆さんも、どこか街路樹で見られたらいいです。今、アメリカフウがありますから。こういう大きな実がなります。そのフウの木が今どこにあるかと言えば、これは不思議です。皇居に唯一残っています。何故あるのかわからない、大木があります。日本では絶滅してありませんけれども。

それに対して桂の木、これは連香樹、共に香る木です。これには意味があります。桂というのは聖なる木です、日本人にとっては。桂の木を見られたことありますか。小さな、若木が何本も旺盛に生命力を出す木です。その桂の木に座って、山幸が玉を口から落すんです。梅原先生、稲盛先生が大好きだった玉を口から落すんです。それで初めて、この桂の木に山幸が隠れていることがわかる。そして豊玉姫と山幸が結ばれ、釣り針を返してもらって豊玉姫と山幸は日本に帰ってきて、そして海幸をやっつけるという、こういう物語です。

結婚した後、豊玉姫は子供を産みます。鵜の羽を敷き詰めた産屋で子供を産むわけです。鵜という鳥です。先ほど言いました、七〇〇〇年前に浙江省の河姆渡遺跡で、二羽の鳥が、太陽を抱きかかえている写真がありましたでしょう。あれは首が長いですから鵜だと思います。鵜飼に使う鵜というのは長江の鳥です。普通そこらにいる鳥ではありません。鵜飼のやり方というのは長江から日本に来たものです。この鵜の羽を敷き詰めて、そして子供を産むときには先祖返りをする、と言うんです。豊玉姫が先祖返りをする。だから恥ずかしいから見ないでくれ、と言うわけです。ところが山幸はそれを見てしまう。見ると鰐がのたうち回って子供を産んでいた、と書いてあるわけです。鰐というのはどこにいるか。鰐というのは揚子江以南にしかいません。黄河にはいません。揚子江鰐が北限です、東アジアでは。鰐がのたうち回っている。ところが古代史家は、鰐を鮫と解釈したり、あるいは龍と解釈したりしました。龍というのは『龍の文明史』（八坂書房）という本がありますから読んでもらいたいけれども、これは北のものです。黄河流域のものです。長江のものではありません。

これに対し鰐は南のものです。鰐は鰐です。何故、鰐か。それもわかってきた。実は鰐は玉を求めて日本にやって来た。長江の人のことを言っているのです、鰐というのは。鰐というのは長江の流域にしか住んでいない。長江より南にしか住んでいない。その古代の人々が鰐、鰐と言ったのは何か。それは玉を求めてやってきた長江の人々です。これは今回初めて言います。どうしてわかるか。日本

というのは玉の産地です。例えば糸魚川の翡翠、素晴らしい玉が出るでしょう。縄文時代以来、玉が出ていた。長江流域の人々が玉を求めようとしたら、どこへ行かなければならないか。古代人にとって陸路はるか離れたウルムチまで行こうと思ったらえらいことです。ところが船に乗ってくればたった八〇〇キロで日本に来られます。だから鰐は玉を求めてやって来た人だと、その時、直感した。そこでまた『風土記』を読んでみた。そしたらこう書いてある。『日本書紀』には、事代主神が八尋鰐になって三嶋の玉櫛姫に通った。玉ですよ、玉。鰐になって玉櫛姫という女性に通った。つまり鰐が玉を求めて下流から来たんです。あるいは『出雲風土記』には、鰐が兄の村の神、玉姫を恋慕って川を上ってきた。こう書いてあります。玉を求めて鰐がやって来るんです。あるいは『肥前風土記』には鰐が川上の世田姫という石の神、玉の神を慕って毎年毎年流れに逆らって上ってくる、こう書いてあります。鰐というのは玉を求めてやって来た長江の人です。ですから豊玉姫が子供を産む時に先祖がえりをする、その姿が鰐ですから、豊玉姫は長江から来た人だということになります。こういうロジックでしたらわかりますね。

山幸と豊玉姫の孫が、初代の天皇、神武です。神武天皇が道に迷ったときに、鳥がやって来て道案内をするという有名な話があります。戦後の古代史家は、これも皆、架空のものだと考えてきた。そうではなくてちゃんと史実が書かれている。熊野神社には八咫烏（やたがらす）という、三本足の八咫烏がいますが、これは長江から来たものです。

我々は柱を大事にする、伊勢神宮の心の御柱、熱田神宮の五柱、あるいは諏訪大社の御柱、皆、柱を大事にする。長江と同じです。鳥を大事にする、柱を大事にする。そして何よりも我々の最高神というのは太陽でしょう。伊勢の夫婦岩、しめ縄で結合されているわけですが、天照がこの夫婦岩の間から昇ってくる。それを我々は崇拝したわけですね。伊勢神宮あるいは日本の神道というものは、長江の稲作漁撈民の神話と非常に深い関係がある。そのことを最初に指摘されたのが、この欠端實先生

の『聖樹と稲魂』（近代文芸社）という本です。

『文明の風土を問う』（麗澤大学出版会）の中でも欠端實先生と私は、日本の神道、太陽を崇拝する神道と長江の間には深い関係があると指摘しています。欠端實先生は一九九六年にご高著『聖樹と稲魂』（近代文芸社）で長江文明と日本神話との深い関係をすでに指摘されましたが、それはまだ私たちによって長江文明の実態が明白になる以前のことで、まことに先見の明のある卓見であったと思います。欠端先生は中国の少数民族ハニ族の研究調査から日本文化との共通性を発見されたのです。この『聖樹と稲魂』は長江文明や日本人の世界観を考えるうえで絶対に読まなければならない基本文献です。すばらしい研究者が麗澤大学にはいらっしゃいますね。

今の少数民族、例えば、イ族の神話では女は太陽の化身で右に、男は月の化身で左。トラの右目が太陽に、左目が月に。つまり右が女で左が男です。そして太陽が女で月が男です。同じように『古事記』ではイザナギノミコトが右目を洗うと太陽、天照大神が、左目を洗うと月読命が生まれる。右が女で左が男です。つまり『古事記』と中国の少数民族との間には同じ世界観があり、稲作漁撈民の太陽神は天照で代表されるように女だということです。太陽神が女だということはものすごく重要です。何故かと言うと、ギリシア神話の太陽神はアポロでしょう。男です。それから漢民族の太陽神、炎帝、男です。だから畑作牧畜型の、パンを食べてミルクを飲んで肉を食べる、こういう人々の太陽神は全部男ですけれども、稲作漁撈民の太陽神は女性であるということ。我々の稲作漁撈文明の意義がわかったところです。

七、稲作漁撈文明の人類史的意味

図15はミャオ族の棚田です。羊やヤギを飼う人々はここへ羊やヤギを放牧するわけです。放牧する

図15　貴州省苗族の棚田

と羊やヤギは草をまたたく間に食べてしまいます。禿山になります。ところが稲作漁撈民はそうではない。こんな急傾斜のところに、ここはおじいさんの水田、ここはお父さん、これは僕です、孫です、ひ孫ですと、営々と自らのエネルギーを、この豊かな大地を生み出すことに注ぐことができる。そこに喜びを感じることができるんです。これは稲作漁撈民の大きな特徴です。例えば、我々は内モンゴルに行って植林します。ところが、何で日本人はこんな木を植えて嬉しいのか、漢民族の人はわからないんです。二五万をはたいて自費で切符買って内モンゴルまで行って、そして植林をしています。それで何が嬉しいんだ、と言うわけです。でも我々は嬉しい。何故、嬉しいか。不毛の大地を豊かな大地に変える、そこに喜びを覚えることができるのは、限られた民族です。それは稲作漁撈民です。水の循環系が完璧にプットインされている。それで水田の中に、ヤゴやゲンゴロウ、コイやフナ、あるいはドジョウ、あるいはタニシなど、生物の多様性がきちんと温存され

ている。ここに溜まった水は、地下水をきれいにしている。美しい森と水の循環系をきちんと維持し、水が流れている限り我々はこの地球で生きていくことができるんです。そして田んぼに水を張って、美しい水の利用をしようと思うと、これは他人の幸せを考えないと生きていけません。そうでしょう。自分の田んぼに入った水を全部自分で使い切ってしまったり汚してしまったら、次の人、困るでしょう。水田稲作農業社会では、自分の使った水はきれいにして他人が使えるようにして返さないと生きていけない。だからそこでは、利他の心、他人の利益を考える心、あるいは他人のことを思いやる慈悲の心というのが生まれる。だから穏やかで優しいんです。絶えず人の幸せを考えながら生きていかないと生きていけないんです。こういう美しい世界観を書いたのが、日本の神話です。日本の神話というのは利他の心、慈悲の心、自然に対する美しい美と慈悲の文明の心を書いたものです。ところが学校教育ではそういうことを絶対教えません。今や日本神話は小学校の教科書で教えられないどころか、研究の対象からも外されつつある。

稲作漁撈民は、山を聖なるものと見なすわけです。森を生やして、美しい水の源となる所です。だからこの聖なる山を崇拝する。山は天と地を結合させ雨を降らせます。その雨の水を水田に使う。水田で水を使ったら、その水が海に流れて、そして魚を涵養する。その魚をタンパク源として食べます。川に水が流れている限り我々はこの美しい大地で生きていくことができます。ところがパンや肉を食べてミルクを飲む、現代文明の原点になった畑作牧畜型の人々の文明では、たとえばギリシアではかつて豊かな森がありましたが、全部破壊してしまいました。誰が破壊したか。羊やヤギが破壊しました。人間が寝ている間でも羊やヤギは草を食べますから。そして禿山の世界に至ります。これは何もギリシアだけではありません。ヨーロッパでも一七世紀の段階でイギリスの森の九〇％、ドイツの森の七〇％、スイスの森の九〇％が破壊されました。そして森が破壊されて行くところがなくなってどこへ行ったか。新大陸アメリカに行った。アメリカというのは森の国でしたが、一六二〇年にメ

イフラワー号に乗ってアングロサクソンが行ってからたった三〇〇年でアメリカの森の八〇％が破壊されました。アメリカ大陸だけではありません。ニュージーランドには一八四〇年にイギリス人が行きます。そうすると森の破壊が始まって、一八八〇年から一九〇〇年のたった二〇年の間にニュージーランドの森の四〇％が破壊された。こうして世界の森は破壊されていきました。

ところが稲作漁撈民は違います。美しい森の大地、水の循環、これを維持していくんです。しかも一万四〇〇〇年前から現在にわたって維持してきたんです。この価値を見直して「稲作漁撈文明が地球を救う」ようにしなければなりません。二一世紀には森はなくなります。二〇五〇年には熱帯雨林はゼロになるかもしれない。世界は、このまま行けばそうなります。誰が押し留めることができるか。稲作漁撈文明が地球を救うのです。

米と魚を食べる文明というのは極めて持続性が高くて、二一世紀の地球と人類を救う可能性があるわけです。

ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

質問　今日のタイトルの稲作漁撈文明が地球を救うということに関してですが、これから稲作漁撈文明を土台にして新たな文明世界をどのように構築していけるのか、見通しがございましたらお教えいただければと思います。

安田　今までは、文明とは、パンを食べ肉を食べてミルクを飲む、バターやチーズを作る人間だけのものであるというのが一般的な考え方です。米を食べて味噌汁を飲むというのはダサくて、文化が遅れているという。食べるというのは実は頭で食うんです。舌で食うんじゃないんです。だからハンバ

ーガーがおいしいと思うのは、アメリカの文明、モダナイズされた近代工学技術文明、その先端にあるアメリカの文明に憧れるということがハンバーガーをおいしいと思わせているんです。だから舌で食うんじゃなくて実は頭で食っているわけです。戦後、日本の家庭がどんどんと朝食がパンになっていった。おいしいということももちろんありますが、それだけではない。やはり文明の力です。我々の稲作漁撈文明が、畑作牧畜文明に負けたことのシンボルです。

肉を食べるということはどういうことか。アメリカの人がビーフステーキを食べますが、小麦粉一トン作るのに水は一〇〇〇トン要ります。ところが牛肉一トン作るのに水は一万二〇〇〇トン必要です。小麦粉の一二倍の水が要るんです。ビーフステーキを食べている人は、大量の水を飲んでいるということです。ところがこの地球に我々が利用できる淡水は二・五％しかない。地球温暖化によって渇水ということが起こるでしょう。水飢饉に直面しますね。我々は森がありますから水はだいじょうぶだと思いますけれども、黄河の流域は一九九七年から断水（断流）しているわけです。黄河の人が何で行き詰るかというと水で行き詰るんです。中国の人々は、豊かになっても水をどんどんと輸入するしかない。

私と服部先生の考えている大きなことは、ユネスコを中心として、金さえあれば何でもできるというそういう世界をアウフヘーベン、超克しない限り我々には未来がない、ということです。市場原理主義の社会をどう超克するのか。難しいです。今は金さえあれば何でもできますが、水だけは市場原理に乗りません。世界水フォーラムが京都であって大議論になった。水を市場原理に乗せるか乗せないか、です。水では儲けられないのです、実は。だからこれが二一世紀という世界は水の危機に直面する。持続的に水の循環系をきちんと維持しながらこの大地でへばりついてきたのは誰かというと、これは稲作漁撈民です。聖なる山を持って、聖なる森を崇めて、鎮守の森をつくって、そこから流れてくる水、その水を水田に引いて、お互いが仲良くその水を利用して、そして海に返して魚を育て

て、その魚を食べて循環的に暮らしておれば、大地で暮らすことができるんです。

私が梅原先生に出会ったとき、梅原先生からお前稲作漁撈文明の研究をしろと言われた時、稲作漁撈に文明などあるはずがないと思いました。多くの人がそう思っています。米を食べて魚を食べることはダサイと思っている。こんな生活はパンを食べてミルクを飲む人々よりも遅れていると、皆、思っています。それを変えることです。米を食べて魚を食べるライフスタイルこそが、大地に優しい暮らしである。そこに住む人々が持っている世界観というのは、太陽を崇拝して、柱を崇拝して、鳥を崇拝して、自然の生きとし生けるものの世界を崇拝する、アニミズムの世界です。パンを食べて肉を食べてミルクを飲む人々の生活は、大地を砂漠に変える。崇拝するのは、唯一天の神様です。大きな違いがあります。この地球を砂漠に変えて、地球の森を破壊してしまったらもう行くところはありません。ここでへばりついて生きるしかないんです。その哲学、ライフスタイルを持っているのは稲作漁撈民です。我々自身がその価値に気付いて、勇気を出して、地球環境問題にあえぐ国際社会の中で、未来に向かって進むしかありません。